

聖書：士師記 3：7～31

説教題：左ききのエフデ

日時：2013年12月8日

2章6節～3章6節で私たちはこの士師記に何が書かれているのか、特に4つの段階が繰り返し現れることを知りました。第一は「イスラエルの背信」、第二は「主のさばき」、第三は「イスラエル人の叫び」、そして第四は「さばきつかさによる救助」です。いよいよ今日の箇所から士師の時代の一つ一つの出来事を見て行くことになります。

7節に目をやりますと、さっそく第1段階が現われています。イスラエル人は主の目の前に悪を行ない、彼らの神、主を忘れて、バアルやアシェラに仕えました。5節6節にはイスラエル人がカナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の間に住み、彼らと結婚したことが記されていましたが、この結果、彼らは主を忘れ、先住民たちが礼拝するバアルやアシェラに仕えるようになってしまったのです。そこで主は彼らをアラム・ナハライムの王、クシャン・リシュアタイムの手に売り渡されます。8年間の苦しみの中で、イスラエルは主に叫びます。ここで彼らが悔い改めたとは書かれていません。主は彼らの叫びに聞いて救いの使者を遣わして下さいました。そのさばきつかさ第1号はオテニエル。主はご自身の霊を彼にお与えになり、彼はクシャン・リシュアタイムを打ち倒します。そしてイスラエルは敵の手から解放され、40年に渡る平和が与えられました。主は偶像礼拝と不道徳に沈んで行こうとするイスラエルにストップをかけ、恵みで包んで、ご自身により頼む本来の生活へ立ち返るようにと導いて下さいました。

ところが、オテニエルが死ぬと、イスラエル人は再び主の目の前に悪を行なったと12節に記されます。すなわち第一段階への逆戻りです。あれだけ苦しい経験をしたのに、そこから何も学ばなかったかのようです。主は次にモアブの王エグロンを強くしてイスラエルに逆らわせます。モアブは約束の地に来るまでに通って来た国であり、決着はすでについている国民です。ところがその彼らが後ろから攻め込んで来ました。イスラエルはこの結果、なつめやしの町すなわちカナンの最初の占領地エリコを奪われてしまいます。さらには貢物まで納めなければならない辱しめを強いられることとなりました。ここから学ぶことは主の方法は一通りでないということです。私たちの予想外の方向から、主のさばきは突然のぞむ。イスラエルはこのため18年間も苦しみます。主は彼らの叫びに聞き、第2号の士師を立てて下さいました。主は驚くべき憐れみをイスラエルに再び示してくださったのです。

そのエフデ。今日の箇所に出て来る3人の士師たちの中でも一番多くのスペースを割かれていて、今日の箇所の中心となる部分です。しかしその内容がなかなか難しい。私たちの頭の中には色々な疑問が浮かんで来るでしょう。おそらくこの箇所を理解するカギは、聖書を読む際にいつも基本となることですが、これらの言葉が最初に語られ、最初に聞いた人たちの立場に自分を置いて読むことでしょう。イスラエルは異邦人の王に支配され、大切な町エリコも奪われていました。貢物も取られ、18年間、奴隷の状態でした。苦しんでいました。そういう状態でこの出来事に接したなら、彼らが示したであろう反応は大いなる喜びであり、主への爆発的感謝だったでしょう。しかもこの物語には痛烈な皮肉、スパイスがきいています。私たちがもし根

っからのイスラエル人だったら、これを読んで浮かれ騒がずにはいられないでしょう。興奮をかき立てられ、同時に思わず笑ってしまうユーモアあふれる神のみわざの記録として楽しんで読んででしょう。

このエフデの特徴は何と言っても彼が左利きであることです。一般的に多くの社会では、「左」よりも「右」が尊ばれ、はるかにまさる地位を与えられて来ました。聖書でもイザヤ 62 章には主が右の手で民を祝福されたと書かれています。出エジプト記 15 章には主が右の手で敵を打ち砕くとあります。詩篇 16 篇で詩人は「あなたの右には、楽しみがとこしえにあります」と歌っていますし、何と言っても私たちの頭に思い浮かぶのは、イエス様が今や父なる神の右の座におられるということでしょう。このように右手は力、栄光、祝福を現わしています。そんな世界でエフデは左利きであった。ヘブル語では「右の手が縛られている」という表現になっています。すなわち大切に重要な右手が使えない人物であった。

そのエフデは貢物を納めた後、一緒に来た者たちを途中から一足先に帰らせ、自分は戻って来て、王様に秘密の話があると言います。王やその家来が少しも彼を警戒していないのは、彼が「左ききの人間」であったことと関係していたでしょう。もし剣を隠し持っていようものなら左もものあたりにそれがあるはずですが、そこにそのようなものはない。ならば大丈夫である。王はスパイの報告とでも思ったか、愚かにも家来たちを皆去らせてしまいます。そして涼しい屋上の部屋に座し、心地良い言葉を聞けるものとばかり思っています。そして「神のお告げがあります」というエフデの言葉を聞いて、この時とばかりは彼も迷信的な敬虔さをもって立ちあがります。その時でした。21 節 22 節：「このとき、エフデは左手を伸ばして、右ももから剣を取り出し、王の腹を刺した。柄も刃も、共に入ってしまった。彼が剣を王の腹から抜かなかつたので、脂肪が刃をふさいでしまった。エフデは窓から出て、・・・」続く 24 節 25 節はほとんど皮肉です。私たちがイスラエル人になりきったら、誤解を恐れずに言えば、このような話の展開は楽しい！面白い！引き付けられる！王のしもべたちは部屋にかんぬきがかけられているので、てっきり用を足しているものとばかり思っています。王様は涼しい部屋できつとりリラックスされているのだろう。それを邪魔してはいけない。ところがしばらく待ってみてもなかなか王様は出て来ません。どうしようか。万が一取り込み中のところに入るのは失礼だし、もうちょっと待ってみようか。そうして待つて、待つて、それでも待つて、しもべたちは考える。「一体どうしてこんなにもトイレに時間がかかるのでしょうか？」その間にエフデはすたこらさと逃げて、戦いの準備を整えてしまいます。そしてしもべたちが部屋を開けた時には、後の祭。イスラエルは王を失ったモアブ人たちを一気に打ち負かし、彼らは一人も助からなかったと記されています。このようにイスラエル人のメガネでこのストーリーを読んだら、その口からあふれ出てくるのは「ハレルヤ！」という言葉でしょう。彼らにとってこのユーモラスで、敵の裏をかくような展開は一層神をたたえるものでさえあったでしょう。

とは言っても、今日の私たちにはスッキリしないものが残るかもしれません。果たしてエフデのしたことは認められるのだろうか。聖書はこれを良しとしているのだろうか、と。私たちが押さえておくべきことは、主はエフデを用いてイスラエルを救って下さいましたが、このことは主が彼の行動のすべてを承認していることを意味しないということです。私たちはそれはおかしいのではないかと口をとんがらせるなら、自らを窮地に追いやることになります。果た

して私たちはいつも良いことばかりしているのでしょうか。少しも欠けのない完全な生活を送っているのでしょうか。むしろいつでも、どんな時にも、そこには不完全さや罪のしみがあるにもかかわらず、神は恵みを与えて下さっているのではないのでしょうか。なのにどうして他人の時だけ、神のしていることはおかしい！と非難できるのでしょうか。

もちろん私たちは、だから少々悪は行なっても問題はないなどと言うべきではありません。ここにはただ事実が記されているだけです。もしエフデに責められるべき点があるなら、それについては主が彼にいつかそのことを問われるでしょう。そのことはここには書いてないのです。なぜならそのことがこの箇所に関心ではないからです。書かれていないこと、分からないことについては主権者なる神にお委ねすることで良しとしなければなりません。

その一方、この箇所がはっきり語っているメッセージはしっかり受けとめる必要があります。主はイスラエルの度重なる不忠実にもかかわらず、なおあわれみ、苦しみの中でうめいていた彼らに息つく時を与え、ユーモラスな展開に笑う余裕さえ与え、安らぎを取り戻して下さいました。主はそのために全く重要とは思われぬ左ききの人を用いて救いをもたらして下さいました。主は私たちの思いを超えて、どこからでも、私たちの救いを導いてくださることができるとお方です。

31 節も同じです。注解者たちが異口同音に言うのは、シャムガルという名前はヘブル的ではなく、その上についている「アナテ」はカナン人の神の名前であるということです。すなわち十分に可能性のあることはシャムガルは異邦人であったということです。主は何とイスラエルを救うために異邦人から救助者を立てて下さった。そして彼が手にしていたのは「牛の突き棒」でした。これで 600 人を打ったと聞きますと、私たちはどんなにスゴイ武器だったのだろうかと思うかもしれませんが、もしこれがそんなに驚くべき性能を持つ武器だったら、以後の人たちは皆この牛の突き棒を手にしたでしょう。むしろこれは牛を飼うための普通の道具に過ぎません。そんなものでも、シャムガルは主によってこのように勝つことができた！素晴らしい武器がなくても、鉄の戦車がなくても、主は牛の突き棒しか持っていない異邦人からも救いを起こして下さいることができるのです。

私たちは今日の箇所で神が語っているメッセージを正しく聞く者でしょうか。イスラエル人は今日の箇所を読んで、どんなに神のあわれみの大きさをその心に刻み付けられたか分かりません。自ら苦しみの中に落ち、もはや見放されて当然の者たちを、主はこのようにあわれんで下さった。この神を仰ぐことは今日の私たちにどんなメッセージを与えるのでしょうか。二つのことを最後に述べて終わりたいと思います。その一つ目は苦しみの中にある人たちに対するメッセージです。それは「主のあわれみに望みを抱け！」ということです。士師記はある意味で最も混乱した時代です。秩序がなく、メチャクチャな時代です。現代の私たちも、時として自分の生活がそのように感じることもあるでしょう。すべてがうまく行っている時は士師記を読んで、何とひどい書だと軽蔑するかもしれませんが、苦しみのただ中にあると妙にこの書が現実味のある書に思われてくる。そしてそこに見るのはボロボロの私たちに関わり続けて下さる主の姿です。主はこんなイスラエルでは私は導かないと言って手を洗って遠くに離れておられません。たとえ自業自得の苦しみでも、主はイスラエルの叫びを聞き、あわれんで、助けて下さった。同じように私たちも、自分の今の状況にもう神が働く余地はないと言ってはならぬ

いのです。主は左ききのエフデから、また異邦人シャムガルと牛の突き棒から救いを起こして下さいました。ですから私たちは救いの方法は主にお任せしつつ、あわれんで下さる主をこの箇所を通して見上げて、悔い改めをもって主に導きを祈り続けるべきではないでしょうか。

そしてもう一つのメッセージは、私たちはこの主の大きなあわれみの上に今日の自分の生活が支えられていることを思ってみるべきではないか、ということです。もし今、私が平和の内にあるなら、それは私の日頃の行いが良いからではなく、この章と同じようにただ主の一方的なあわれみによることかもしれません。主はこの時のイスラエルをあわれんで士師を送って下さり、助けて下さいましたが、今や私たちにはまことの士師を送って助けて下さっています。この時の士師たちは、やがては死んでその影響力が薄れていくという意味で一時的な救い主であり、欠けがある救い主でしたが、まことの士師イエス様は永遠に生きておられる士師であり、何一つ欠けのない完全な救い主です。神は私たちをあわれんで、士師記が指し示すまことの士師をこのクリスマスの時、私たちのところに送って下さいました。私たちは自らの上に注がれている神の大きな憐れみを感謝し、この救い主と結ばれて、神の憐れみに応える歩み、神をお喜ばせする歩みを御前にささげる者へ導かれたいと思います。